
ファンタジーワールド番外編 - 訳ありのお姉さんと僕 -

ビーグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジー・ワールド番外編 - 訳ありのお姉さんと僕 -

【NZコード】

N8741G

【作者名】 ビーグル

【あらすじ】

マジメで人見知りで自分に自信がない少年はバスで出会った女性に何か惹かれていくが、そのお姉さんは訳ありで……。ファンタジーワールド・First Mission・の番外編！

第一話 お姫さんの丑聞

「…………て。…………れ…………」

ん？ 僕を起しそのはだれ？

……ねむい。

もう少し寝かせてくれよ……。

「…………す。…………や。…………れ…………」

このぬくもりをもう少し堪じてみたい。
もう少しだけこのまま……。

「もう少し待つて。 かあちゃん……」

「え？ まだ寝ぼけてるの？ 早く起きなさい」

「…………」

「しようがないわね」

頬に電撃が走る。

反射的に目が開き、緑と黒のコンタリストが映る。
あれ？ 僕の部屋は白で、家具も木だから緑と黒なんておかしい。

「田が覚めた？」

真上から声が聞こえた。

あれ？ なんで誰かの声が聞こえるんだ？
俺は一人暮らしだから、誰かに声をかけられることなんてないん
だが……。

『ロシガシと皿をこする。』

ボニコ

そんな効果音が聞こえてきたら、感触が右ひじで感じじる。

バツと瞬間に起き上がり、右を見てみる。

「…………」

「起きたのはいいけど、早く降りないと乗り過ぎちゃうわよ」

見知らぬ女性が座っていた。

いや、視界に映る人はその人だけじゃない。

声は発しないもののサラリーマン、学生、その他もうもうの人影
が見える。

後ろを見てみると、窓がありそこに見覚えのある学校が見える。
……『バスじゃん！ それでもう田舎地じゃん！』

そこまで思考してから一つの事実に気づく。

『この人にもたれて寝てた』

「わっ、『めんなさい』『めんなさい』……！」

「い、いやそれは別にいいんだけど、早く行った方が……あつ」
女性の視線の先を追いかけてみると、ガチャッと音がして閉まる
ドアが見えた。

「……わっ、すいません！！ 僕降りま～すー！」

これがお姉さんの出会いだった。

「いや、ホント昨日はすいません。もたれて寝た上に胸まで触つ
てしまつて……」

「そんなの気にしないでいいよ

「いやでも……」

「もういいの。周りの人も見てるし、その話はやめて欲しいんだ
けど……」

「あ……、すいません」

周りを見ていると皆がこひらを見ている。

その中には僕と同じ制服を着ている人もいるし、ほぼ全員が昨日の一幕を見ているだろ。」

それを意識したら、急にカーッと顔が熱くなる。

「……。つもり」

流石に立腹のようだ。
やつぱり見知らぬ男に寄りかかられて、そのうえ胸まで触られた
ら怒るよな……。

それから僕が降りるまで終始無言だった。

「あのこれ、この前のお詫びといつか……」

そういうてカバンから、綺麗にラッピングされたお菓子を出す。
クッキーが入っているのだが、これなら嫌いとかなそうだし。
それにもあんなことがあっても、僕の隣に座り続けるんだ……。

いや、僕の隣以外は空いてないからなんだろうけど。

「え？ だから気にしてないわよ」

「いや、それでも……」

「受け取れません」

「それにお礼も含んでいるんです。あの時起いにしてもらひえなければ遅刻でしたし……」

……。

……。

30秒くらいいじつとお菓子を差し出し続けていたら、不意にお菓子をとられた。

「全く。強情な子ね」

そう言って困ったように微笑んでくれた。

大人びいて見える彼女が、困ったような様子はちよつと新鮮に見えた。

女性にプレゼントなんて照れくさくて、学校に着くまで窓の外を見ていた。

「クッキー、おいかつたわ。

ありがと」

「いえ、そんな。お礼を言つのはまことにありますよ」

「ただ起こしてあげただけよ?」

「はい。それでも助かりました」

「そんなにあなたの学校つて遅刻にうるさいの?」

「はい、学校は元々厳しいんですけど、僕は生徒会長つていうのもありますから……」

「キミが生徒会長?」

「へえ、といいながら頭のてっぺんから足元見られる。女性にジロジロ見られるのって緊張する……。

「確かにマジメそうなんだけど……、もつと堂々としてた方がいい

「堂々ですか?」

「うん。確かにキミみたいなマジメな人が生徒会長つていうのは確かに安心なんだけどね。でも頼りがいのある人が頂点にいたら、みんな信頼できるし」

「やっぱり僕は頼りがないですよね……」

「それがダメなの! もつと胸はって、前見て、しつかりしなさい」

「はい……」

「返事もしつかり！」

「はいっー。」

そういわれると何か元気が出てきた。

確かに僕はお飾りの生徒会長だ。

生徒会長とは名ばかりで、生徒会の皆は僕の言つことを見ていってくれないし、全校集会も話し聞いてくれないし。

先生だって僕に相談するよりは、副生徒会長に相談するし、会議だって僕はあまりしやべらない。

あだ名も苗字と名前の頭文字をとつて、イマイチ君って呼ばれるほどだ。

何故そんな僕が生徒会長になれたか、と聞かれれば、僕以外に候補がいなかつたからとしか答えられない。

今日からはもうちょっとしつかりしてみよう。

その後は、どういう態度をすればしつかりした人に見えるかとか教えてもらつたり、髪とか眉毛とかいじつもらつた。

僕がバスに降りる時、「バイバイ。また明日」と声をかけてくれた。

それが嬉しくて、「また明日」と笑顔で手を振った。

「昨日はお姉さんのおかげで、皆の態度が変わったんですね。
ありがとうございます」

「やべ、役に立てよかったです。それよりお姉さんって？」

昨日はお姉さんの言つとおり、しつかり、堂々とした態度で集会に臨んだ。

『生徒会長の話』の時も、緊張したけどカンペ見ずに最後まで、つまりながらも言えた。

その間、誰もしゃべらない、とまでいかなくても、ほとんどの人が話を聞いてくれた。

集会が終わった後、生徒会の女子に「感じ変わったね」とか「今日の先輩格好よかったです」って言つてもうられたのが嬉しかった。これも全てお姉さんのおかげだ。

「え？ だめでした？」

「ダメってことはないけど、私もつるんな年じゃないわよ？」

「え？ 何歳なんですか？」

と反射的に聞いてから、しまった、と思つた。

クラスとかで、誕生日が過ぎたかどうか、という意味で何歳って聞くことがあったからそれと同じ感じで聞いてしまった。
怒られるのと嫌悪されるのがいやで、すぐに謝つた。

「あ、」めんこくつみえる？」なさい……え？」

「だから、いくつに見える？」

怒るでもなく、発せられる雰囲気と言葉はからかいを含んだ疑問だった。

「え、いくつ」……って

お姉さんを見てみる。

大人びいた顔や雰囲気、艶やかな髪、濃くない薄化粧。
何となく大学生に見えないけど、当然高校生にも見えない。
そこでなぜか、学校にいる国語の新人女性教師を思い出す。

「24……、ぐら」ですか？」

「え？ もう一回言ひて？」

あれ？ 間違ったかな？ これで「私まだ大学生」って言われた
ら、失礼だったよな……。
でも、何となく合ってるような気がして、もう一度自信をもつて
言った。

「24ぐら」だと思います

「嘘……じゃないよね？」

やつぱつむつと若いのかなあ。

「すいません。 もうと若ですか？」

「…………」

黙りこんでしまった。

やつぱり失礼だったよなあ。

「！」みんな lagi、やつぱりもうと若かったですよね……」

「…………」

「やつぱり怒つてしまふ？」

「ふえ？ い、いやそんなわけあるわけないじゃない」

それから話しかけても反応が薄かつた。

ちょっと顔も赤かつたような気もするし、やつぱり女性なら実年齢より上に見られたら恥ずかしいのかな……。

これからは年齢の話は禁句、と覚えておこう。

結局、別れの挨拶を言つても、軽く頷かれるだけだった。

「あれ？ 今日も学校？」

話しかけてきたのは今日は会はずのない、お姉さんだった。

「あ、はい。お姉さんこそ、土曜日にもお仕事ですか？」

「うん、2日も休んだら生活が苦しくて」

そう言って苦笑するお姉さん。

ふつふつふ、お姉さんは鎌をかけられたのを氣づいていない。
今日も仕事、といふことはお姉さんは社会人といふことだ。

「大学生でも働きながら通う人もいるよ」

「そうか、じゃあ今の質問は意味がなかつたのか……ってあれ？」

「お姉さんを騙そつなんて百年早いわよ。 キミの考えはお・み・
と・お・し」

「じめんなさいじめんなさい。 どうしても知的好奇心が刺激されて
しまつてですね……」

「うん、どうしようかな~」

お、お姉さんが笑いながらこつちを見てる。
僕は何をされるんだ？

「いみんなさい。」のと一つです」

やつこつてひざひづくまで、頭を下げる。
座席に座りながらなので、結果的にお姉さんの方に向いてないが、
誠意は分かつてくれよ。

「あ、頭まで下げなくていいわよ。うーん、でもやつねえ……。

素直に頭を下げたキミにはヒントをあげよう

「え？ ホントですか？」

「昨日のキミの予想はおおハズレよ」

やつ言つて、手を口にあててクスクスと笑つ。

昨日の予想がおおハズレ？

じゃあ、やつぱりまつと若いのかなあ。19とか？

「年齢の話はこれでおしまい。土曜日の学校つじことは部活だよ
ね。何部？」

「卓球部です。まあ今日も普通に授業はありますけど」

「え？ 授業あるの？」

「今時珍しいですよね。学校の方針で第2・4土曜日以外の土曜
日はあるんですよ」

「へ～。流石に遅刻に厳しいことはあれわね……」

「それは関係ないと思います」

今日はお互に終始笑顔だった。
こんな楽しい日が續けばいいな。

第一話 お姉さんとの会話

「あれ？ 今日も学校？」

昨日と同じセリフでお姉さんが乗車してきた。
やはり一週間連続で会つていうのもなんだか変だ。
いや、明日から土曜日まで会うと思うから、まあ2週間
会つ計算になる。

本当のことをこいつが嘘のことをこいつが迷ったが……、いろいろ
してくれたお姉さんに嘘をつるのは気が引けたので、本当のことを
言つ。

「いえ、学校ではないんですけど…………」

「？」

「…………」

ものすごく恥ずかしへり、そのままを向きながら、小声で嘆いてしまひ。
なので、

「…………お姉さんこないこ」

「え？」

聞か逃されてしまった。

もう一度言つのか？ 僕にそんな勇気はないんだけど…………。

残りかすのような勇気を体中から振り絞り、再び、しかし今度は聞こえるように言った。

「お姉さんに会いに来ましたっ！」

恥ずかしそぎて、お姉さんの顔を見れなかつたので、言った後再び窓の方を向いてしまう。

数秒は沈黙だつたが、クスクスと笑い声に変わる。

「あら？ 私なんかに会いに来たの？」

「は、はい」

「私が来なかつたら？」

「次のバス停で降りて帰ります」

「あらあら」

「えと、あの、その、なので今日はお姉さんが降りるところまで乗つてしまふ」

「最後まで乗つてるわよ？」

「もちろん、大丈夫です」

そう言い切ると、またクスクスと笑われる。
何はともあれ、嫌がられるということはないようだ。

出会いが最悪だったため心配だったが、一安心だ。

そのまま、他愛の話をしていた。

「そりそろ終点ですね」

「この後はどうするの?」

「え~と、帰つてたら勉強してると想います。」

学校でしゃべる友達はいても、遊ぶ友達はいませんか?」

「え? まさか本当に私に会いに来るために来たの?」

「信じてくれなかつたんですか?」

「それはそうよ。え~, そなんだ~。ちよつと嬉しいかな~」

「ホントですか?」

「そうね。自分のために何かをしてくれる、つてこいつのは嬉しいものよ」

正面から笑顔で言われる。

バスの座席というのは広く、狭いらしく、顔が至近距離にあり、かなり恥ずかしい。

それで僕は……、やまばつのまゝを向いてしまつ。

「良かつたら1時に改札で待つて。」
「飯」走るから

「良かつたら1時に改札で待つて。」
「飯」走るから

「も……」

振り向かせやまに「もちろん待つてます」と言おうとしたら、いつの間にか止まつてたバスのドアからとつとと出でしまつていった。とつとと出でしまつたので、聞き間違いだつたかも知れないけど、食事に誘われたのが嬉しくて、絶対に待つてよう、と思つた。

「あ、お姉さん！」

駅前の喫茶店で宿題を終わらせたら、ちゅうどいい時間だったの改札に行つてみるとすでにお姉さんがいた。
柱を背に、凛々しく待つてゐる姿もやっぱり大人びいて格好いい。何となく、小走りでお姉さんのところへ向かう。

「待ちました？」

「常々（つねづね）思つけど、それって待つても待たなくても『今來たと』って言わなきゃいけないのよね

「正直に言つてもらつていいですよ？」

「仕事を早く終わらせようと思つたら、思つたより早く終わつてしまつて30分前くらいに着いちゃつた

「えっ！ そんなに待たせちゃいました？」

「ふふふ、うそ」

「ええ、そんな」

「ふふ。ま、こんなところで話すのもなんだから、移動しながら話しましょうか

そう言って、お姉さんが先行する。慌てて追いかけようとしたとき、

「でも早く仕事を終わらせたのは本筋よ」

と言われた気がした。

「みや、しほ、こうひな、どれがいい?」

「し、しおで」

「店主さん、しおり」

「せこむ！」

つれてこられたのは近くの裏路地にある小さなラーメン屋だつた。今時、カウンター席だけのラーメン屋なんて珍しい。客はいない。それにしても、お姉さんがこいつに来るなんて、少し新鮮だ。

いや、お姉さんのことあまり知らないから、新鮮も何もないかもしれないけど。

「お姉さんはよく来るんですか？」

「そうね、週に2回はここに来るわね。
安いし、おいしいからね」

「へえ、こくらうなんですか？」

「一皿350円」

「や、安いですね」

価格高騰と言われる現代で、まあ500円以内で食事を済ませられる店とここののは存在しないと言つてここ。

まず、原価が高い。

価格高騰を受けていないのは日本では米だけなので、小麦を使うラーメンも例外ではない。

それに光熱や水道も近年は民営化した。

国で支えられなくなつた結果なのだが、国の支えが完全になくなつてしまつたそれらは10年前の3倍以上と聞いている。
ましてや駅前の店だ。

土地も高かつただのつじ、びひひひ、やりくりしてくるんだろう
うか？

そう思つてるとお姉さんはムツとして、

「安い」飯で悪かったわね

「い、いやそうこうの意味じゃ……」

怒りせてしまつたか？ と思ふじゆうめんに弁明しようとする
と、今度はパツと笑顔になつて、

「分かつてゐるわよ、冗談冗談。 今日は私のおじりだし、味も私が
保証するから安心して」

といわれる。

友達の[冗談は口だけで表情までは変わらないので、冗談とすぐ]
分かる。

のだが、お姉さんの場合は表情まで変わるので、本気か[冗談か全
く判別がつかない]。

あんまり一方的にからかわれるのせりよつと悔しいので、口を尖
らせて、

「お姉さん、意地悪です」

「ほいほい、お姉さんは意地悪ですよ~」

そういうのに、笑顔で返されてしまつた。
[冗談だと分かつているようだ]。
ちよつと悔しい。

「今日のお姉さん、楽しそうですね」

おまかせへ、といつてラーメンを差し出されたのは、先ほどの

店主なんだ。

「どうやら、アルバイトを雇わずに経営する」とで、人件費がかかってないのが安い値段の原因か？

まあ、全部がそうでないのは分かるけど。
それはそうと、ラーメンの方は見た目、普通だ。
麺、つゆはもちりん、のり、メンマ、チャーシューが少し入っている。

「やつぱりそう見える？」

「いやー、この子が可愛いって」

「か、可愛いって」

僕は男で、確かに格好いいと言わたることないけど、でもだからって、か、可愛いって……。

「まあ、お姉さんにとっては可愛いんでしょ」けどね。
あんまり年下にじめちゃいけませんよ」

「2人からしたら僕は可愛いですか？」

「うん」

お姉さんに即答された。

まあ、お姉さんにはさつき可愛」と言わたから予想は出来てたんだけ……。

「店主さんもそう思いますよね？」

「ああ」

ああ、そんなん……と面おもづけ思つたのに、坊主さんが何か真剣な表情をしている。

反応が微妙すきで、どう反応していいか分からなく、そのまま発言タイミングを失つて口を開じてしまった。

「店主さん、そんな顔しないでくださいよ。」この子も黙つちゃつたじゃない

「……これはお節介かもしけねえが、坊主」

「へ？ 僕ですか」

「おひ、坊主だ」

お姉さんにはお密さんで僕には坊主つて……。

「坊主、このお密さんに惚れてるんだろう？」

真剣な表情つくりて、何を言つてくるのかと思つたら、ただの痴話だった。

「え、そんないや、そんなもんじゃなくつて……

「惚れてるんだろう？」

「は、はー」

ずい、と顔を近寄られて、思わず頷いてしまった。

あんな迫力のある顔を近づけるなんて卑怯だ！

ま、まあ、お姉さんと話してみたいとか、会いたいとか思うのは
惚れてるっていつのかなあ？

でも、惚れてるって言われて、悪い気はしない。

しかし、はあ、と息を吐かれて、

「坊主、このお姫さんはやめとけ」

「は？」

「ちよっと坊主さん？　いきなりそれは失礼じゃない」

「確かにお姫さんはこの坊主に勿体ねえくらい別嬪さんで、氣立
もいい。俺が嫁にもらいたいぐらいいだ。
だけど、お姫さんの宿命を背負えるほど、この坊主は強くねえ」

「しゅ、宿命？」

話が突発的すぎて、わけがわからない。

「店主さん、私が宿命を負つてゐるってどうこいつ」とへ。

「お姫さん、お前さんも分かっていろはずだ。
何かに追われているんだる？」

「あなた、誰？」

スッ、とお姉さんが立ち上がり、雰囲気をがらっと変える。威圧するような視線で店主を見ている。

「お、お姉さん？」

「お姉さん、切羽詰つてるのは分かるがよ、熱^{いき}立^{だつ}ち過ぎるのは良くなないと悪いだ。

俺みたいな若者にもすぐに分かっちゃうくらい、今のお姉さんは分かりやすい」

「…………そりゃ『めんなさい』

やつことと、立つときとは違ひ、やつたつと腰を下す。雰囲気も驚くほどやわらかくなつ、やつあまで殺氣が嘘のようだ。

あつ、今のギャグじやなこだ。僕はこんな場面でギャグをいつまどり、空気が読めないわけじゃない。

「まあ、いつこう仕事をすると、だんだんお姉さんを見る目が良くなれる。

特に、小さな辺境で店を構えてると、な

「……そりですか

な、なんか、勝手に話が進んでる。僕はどうすればいいのか？

いや、どうもしなくていいのか？

「まあ、やつこいつねで、坊主。」お姉さんはやめとれな

「は、はあ」

これなりそうにわれても、はこそりですか、とは言こづりこが、
お姉さんが何も言わないみたいの通りなのだから。
不本意だが、しぶしぶ頷く。

「あの、といひで氣になつたんですけど……」

「え？ した？」

「せつとき店主さん『俺みたいな若者』とか何とか言つてしまつたけど、
その失礼ですか、店主さんってそんなに若くないんじや……」

「やつや、坊主にひとつは若くなつだろつよ。 俺は今年で29だ
からよ」

「坊主にひとつは……つて、お姉さんひとつは違つたですか？」

すると、店主さんの田字が丸くなり、沈黙が流れる。
すぐ口へへへへ、と笑いをこらめたよつた声が聞こえて、ムツヒ
て、

「何がそんなにおかしいんですか？」

「へへへ、流石に女性で年上の話せりふをいかんよ」

と言つても、意味の分からぬことを返される。)

何がそんなにおかしいんだ?

でもこの話題はお姉さんが怒る

でもこの話題はお姉さんが怒るし、すぐに流そう。

「いえ、話してあげてください。」この子に未練を残させたくない
ので

「へへへ、お嬢さん、わざとか？」

「い、いえ。まさか惚れられてるなんて思わなかつたので……」

「の前24つて言つて微妙な顔されたりし、答えづらい。お姉さんの方を見ると「クツ、と頷かれる。
だから……、

「21、だと思います」

「な、何言つてゐるのよ。」この前まへ4つて言つてたわ

「まひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひま

ついに笑いがこらえられなくなつた、といわんばかりに店主が盛

大に大爆笑する。

お姉さんの方を見ると、いつもいて何も言わない。
心なしか顔が赤く見える。

よつやく、笑いが微妙に止まつ、店主が口を開く。

「いや、確かにそうだな、へへへ。お姉さん、今から市役所に年齢の申請をしてきらう」「だー?」

「か、からかわないでくださいー!」

そういうながらもお姉さんは、顔をあげない。
相当恥ずかしいらしい。
いつも余裕を保っていたお姉さんからはとても想像できない。
これが年の功か?

「坊主、俺の見立てを教えてやるつか?」

「え? は、はあ、お願ひします」

「やうだなあ、俺の見立てだと……やうじゅうじうだな

「ええ! お姉さんが……やんじゅうじうだ?」

30代と聞いて、化粧の濃い口づけで英語の先生や、ほれぼれとの髪にめがねの冴えない理科の先生を思い出す。

似ても似つかない。

「うん、まあ、当たりとも遠からずして感じね。私は35」

「35? そんなあんな気持ち悪い先生と同年代なんて……」

「あれ? 優秀校の生徒会長様が教師の悪口を言つていいのかしら?」「いくら頭のいい生徒を集めた学校つて言つても、先生まで頭がいことは限らないんですよ……」

「ははっ、真理だな。

「ネを使って学校の知名度をあげて、入試の試験問題を難しくするや優等生なんて簡単に集まるつてもんだ。

それに気づいたって意味では坊主もなかなか頭のいいこつた

「頭が良くなくても、授業を受ける側になれば自然と分かりますよ

「ははっ、なるほどな」

その後は店主さんに新しくラーメンを出されたことによつて、放置されていたラーメンが伸びていて気に気がついた。

僕たちは慌てたが、「お代はいらねえ」とか言われて僕は取り出しがけたサイフをポケットにしました。

しかし、お姉さんは「授業料も入つてるから」といつて、強引に2千円払つた。

しばらく、互いに言い合つていたが、最終的には「また伸びちまうからやつをと食つてくれ」といつて、お代をもらつていた。

今度は会話もしながらも、食事もちゃんとした。

「それじゃあ、また来ます。」
「おいしかったわ。」

「あこよー。」

やつして僕たちは店を出た。

その後、僕の希望で映画を見た。お姉さんの希望でラブロマンスになつた。

映画を見た後はお姉さんの希望で買い物にいった。夕食の材料らしい。

やつして僕たちは帰路についた。

「今日は楽しかつたです。誘ってくれてありがとうございました」「

「私も楽しかつたわ。また今度……と言いたいところだけど……」

「え?　だめなんですか?」

「…………うん。本当に残念なんだけど」

「…………やつ……なんですか?」

「やつ……おの宿命の話、覚えてる?」

「ええ。　こつてもお姉さんと宿命があるって話だけしか聞いてませんけど」

「…………まだ、お姉さんって言つてくれるんだ?」

「はい。今更、「お姉さん」と言つても違和感がありすぎですか？」

「ふふっ、ありがと。」

……それで宿命つていつのは私、ある人から逃げてるんだ」

「……なぜかきこへっこですか？」

「「めんなさい。」これは「えな」の。
それでここを勘ぐられた可能性があつて、今すぐここでも「」を出
ないといけないのよ」

「……やつですか。お姉さん」

「何？」

「ひに来ませんか？」

「え？」

「あの、その、お姉さんの家がだめなら、「」でここののはだめ
ですか？」

「お誘いは本当に嬉しいんだけど、それだと私が外に出れないでし
ょ？」

だから本当に申し訳ないけど、町を出なくちゃ……」

「やつですね……。無理いつすいません」

「いえ、言ってくれて嬉しかったわ。ありがとう。
気持ちだけ受け取つておくわ」

「はい……」

「…………」

「…………」

それから、僕たちはバス停に着いたら別れてしまつたのだろう。
それはとても残念なことだ。
とても残念だけど……しうがないことだ。
僕には力も覚悟もない。お姉さんを救えない。

「……お別れね」

「…………ええ」

「しつかりなさい。一週間前と同じになるだけじゃない

か。
でも……、だからといつてさびしいのは変わらない。

ちょっと前までは、家族から見放され、クラスの連中も一部を除いてのけ者にして、生徒会長なのに会議で空氣。

そして、その一部を改善してくれたのはお姉さんだ。

クラス連中どこのか全校生徒に見直され、生徒会でもしつかりと発言できている。

それに、最初に僕とともにしゃべってくれたのは、お姉さんが

初めてだ。

僕の取柄は、マジメなことと成績だけだ。

がり勉ではないが、がり勉っぽい僕は忌み嫌われていた。

一応、生徒会長だから大口叩いて言つ奴はないが、ひそひそといわれてた。

そんな僕と初めてまともに話してくれたのだ。

僕はお姉さんともつといたい…………。

でも……、わがままはいえない。

「いえ、一週間前とは違いますよ。お姉さんのお陰で、学校では空氣じやなくなりましたから」

「……ふふっ、落ち込んでくれるかと思つたけど、わざわざなくて安心したような、がっかりしたような……」

「落ち込んでますよ。だけど、お姉さんこれ以上迷惑はかけられませんよ。

今の僕じや、心配の種にならなによつて頑張ることしか出来ませんから……」

「やつ、成長したわね。よかつたわ。

……それじや、もう行かなきや。

「この町に戻れたら、いつもの時間にこのバスに乗るから。
またね」

「今までありがとうございました」

最後にお姉さんを見ると泣きそうで、今もちょっと涙が出てて見られたくなくて、感謝の意味を込めて、三重の意味で頭を下げた。

プシュツ、ヒドアが閉まる。

その音で僕の我慢は限界を超えたのか、涙がボロボロ落ちてくる。

それを袖でぬぐうと、今度は嗚咽が漏れてきた。

全然成長できませんでしたよ、と心でお姉さんに返して、泣き崩れてしまつた。

……それが僕の初恋の失恋話。

第三話 見知らぬ少年との一週間

会ったのはじっくり普通な少年だった。

いつも同じ時間にバスに乗るとたまに見かける少年。

長すぎない黒髪。素直な目。ボタンを上まで閉めて、ネクタイもキッチとした乱れのない制服。

普通のマジメな少年見えた。

初めて会話をしたのは、6日前の朝だった。

その少年は、私にもたれて寝ていた

しばらぐすると、学校前のバス停まであと少しのところまで来ていた。

流石にマズいと思って、起こすもなかなか起きなかつた。

寝不足だったらしい。

雰囲気で悟つた。

マジメな生徒っぽいのだ。何か、学校で進まない企画でもあるのだろう。

本当に気持ちよさそうに眠るので起こすのは気が引けたが、それは少年のためにならない。

頬をつねつてみた。

起きたのはいいが、田をこすつてると、たまたま胸にひじが当たつた。

まあ、別にどうでもよかつた。これが20年前の私ならちょっとは怒つたのだろうが、そんな年でもない。

だけど、少年は必死に謝つてきた。

そういうしてて扉が閉まつた。

少年は慌てて、叫びながらバスを降りていった。

その次の日、何となく昨日もたれて寝ていた少年の隣へ座つた。

座つて目が合つたと同時に、謝られた。

マジメな少年のことだ。かなり悪く思つてゐるのだろう。
しかし、私の方は気にしてなかつた。

それよりも少年が、胸 といつ単語を私へ発した時から発生し
てる視線の方が痛かつた。

そのことをいつと、少年は周りを見渡した後、赤くなつて外を向
いてしまつた。

ちょっと拗ねてみたけど、おばさんがすることでもないな、と反
省して黙つていた。

また次の日、また少年の隣へ座つた。

座つたと同時に、包装された箱を差し出された。

断つて、無視もしていたが……、少年も手を引っ込めない。

やがて、これを受け取れば少年の氣も済むか、と受け取つた。

一応、贈り物をもらつたので、笑顔で礼をした。

そしたら、赤くなつて、そっぽを向かれてしまつた。
純情な子ね、と苦笑しながら、でもその雰囲気を嫌いになれなく
て、黙つて座つていた。

やがて少年は学校前で降りた。

箱の中身はクッキーだつた。この町で評判の店のクッキーだ。

仕事の休憩中に頂いた。

評判の店のクッキーだからか、少年からもらつたからか、どちら
もなのか、他の理由なのか。
とりあえず、おいしかつた。

少年と初めて会つて4日目、今日もまた少年の隣へ座つた。
クッキーのお礼を言つたら、なぜかお礼を言われた。

理由を聞いてみると、生徒会長だから遅刻は出来ないんです、と
語られた。

今まで普通のマジメな子だと思つたけど、確かに考えてみればこ
の時代に、ここまでマジメな生徒は珍しかつた。

時代が流れ、マジメや謙虚も流されてしまったのだ。
この子は数少ない、時代に流されない人だ。

そう思つと勿体ないと思つた。

ここまでいい人間なら、胸を張つて自信を持てば、いい大人になるはずだ。

そうして、未来に、素敵な大人が一人増える。

それはいいことだ。

そう思つたから、少年にアドバイスをした。

どういつ言動で皆の信頼を得られるか、どう気をつけて行動すればいいか。

どうすれば緊張を軽減できるか、どう考えてれば冷静に行動できるか。

そういうことをドンドン言つていいく。

少年は必死な顔をして、私の言つたことを頭に叩き込んでいた。

頑張つてる少年を見て、もっと応援したくなつた。

せつかく手が空いていたので、もうちょっとキレのある髪型や容貌にしてみた。

化粧品の類や眉毛をそつて描くのは、せつかくのマジメさが損なわれるので、髪を整えて眉毛もキリッと見えるように剃つて。

制服を直した所で、学校前についた。

教えることは一応全て教えられたので、満足だつた。

しかし、元気がなければ意味がないので、一応元気はあるみたいだが、また明日、と挨拶をしてみた。

そうすると、笑顔で、また明日、と返された。
ちょっと嬉しかった。

今日の仕事は頑張れそうだ。

平日の最後、田舎となつた彼の隣の席へ今日も座る。

座ると同時に昨日のことを報告された。

どうやら全校集会があつて、ちゃんと成功したようだ。

ちょっと嬉しい。

しかし、妙なことを言われた。

少年からは お姉さん と呼ばれた。

念のため、何歳に見えるか、と聞いてみた。

24歳つて返ってきた。

嬉しいけど、恥ずかしさが30倍くらいあった。

ボーッとしていたのだろう。

少年に、怒りますか、と聞かれるまで周りが見えてなかつた。緩んでいた顔の筋肉を引き締めようと思つても、ぜんぜんダメだつた。

それからのバスでの出来事はあまり覚えていない。
結局、我に帰つたのは終点の駅についてからだつた。

昨日の仕事は結局仕事がはかどうか、終始頬が緩みっぱなしになつた。

同僚に、何歳に見えるか、と聞いた昨日の私の頬を本氣でひつぱ

たいてやりたかった。

今日はその同僚と顔をあわせるので、気まずいな、と思いながらバスに乗り込むといつもの席に少年が座つていた。

なぜいるのか、と聞くと今日も学校があるらしい。

進学校は大変だ。

そう思つてたら、何か企んだ顔で、今日も仕事ですか、と聞かれ

た。

何を企んでいるのかは知らないけど、特に隠すことでもないので無難に、仕事、と答えた。

そして、ニヤリと口角を上げられた。予想通りの回答がちじー。

あ、どうか、学生かどうか確認されたのか、と気づいたので、大学生でも仕事はする、といふとマジメな顔でノリツッコミを返された。

彼は天然らしい。

ちょっといたずら顔で、カマをかけたことに対しても何をしようか、口に出しながら悩んでいると、素直に謝つてきた。

せりへ、じりじりつかなあ、ともつたいくつてると、頭まで下げられた。

軽口だつたので、慌てて頭を上げさせる。周りの視線が痛い。

まあでも、年が気になるのは仕方ないな、とは思った。

昨日、無反応だった謝罪もこめて、おおよそヒントとはいえないようなヒントを出した。

これ以上は流石に恥ずかしかったので、話題の変換を試みる。彼もこれ以上は言及せずに乗ってくれた。

「冗談や世間話で笑い合えた。

不覚にも、こんな日が續けばいいな、と思つてしまつた。

今日はいつもましてハイテンションだ。ルンルン気分だ。

昨日は同僚に、最近若くなつたね、って言われた。

やっぱり、若く見られるのはうれしい。

あの少年のおかげかな、少し感謝しないと、と思つていると今日も少年がいた。

流石に日曜に授業はないと思つから部活なのだろう、と思つて聞くと、なんと私に会いにきたといつ。

恥ずかしそうに言つてたが、流石に「冗談だと思つたので軽く流した。

結局、少年は最後までバスに乗つていたので、市外へ用事だろうか、と思い、本日の予定を聞いてみた。

予定がないから帰つて勉強してると思います、と返された。

本当に私なんかのために、会いに来てくれたようだ。

うれしい、といつたらそっぽを向かれてしまつた。照れているらしい。

本当は3時まで仕事があるのだが、1時に駅に来て、といつてしまつた。

私も年の差が開きすぎる相手を誘つのは、恥ずかしかったので
すぐに外に出てしまつた。

返事は聞かなかつたので、来るかどうかはおろか、聞こえたかど
うかもわからないが、律儀な彼なら待つているだろう、と勝手に決
め付ける。

なので、同僚にも協力を要請し、今日の給料の3分の2あげるか
ら、と強引に言つて手伝つてもらつた。

そして強引に1・2時に仕事を終わらせ、同僚に礼を言つて5千
円を渡して、会社を発つた。

そして到着したのは、1・2時半だつた。

30分も早く来て少年が待つてゐるはずもなく、仕方なく柱を背
に辺りを觀察した。

それにしても、駅前は本当に店がいっぱいある、と関心していた。
その中には喫茶店や本屋など時間をつぶせる店もたくさんあつて、
どの店で時間をつぶしてゐるのかな、とか、帰つて勉強しようとして
たくらいだから、喫茶店で勉強しているのだろうか、とか思いなが
ら辺りを見ていた。

それでいつの間に時間がたつたのか、お姉さん、と声をかけられ
た。

時計を見ると5分前。十分、社会人としてやつていける。

30分くらい待つた、といつたら慌てられたので、嘘、と言つた。
途端に笑顔で悔しそうな顔をしてたので、嘘が嘘とばれないよう
に、移動しながら話そう、と提案した。

素直に従われて少し癪だつたので、仕事を早く終わらせてきたの
は本当、と言つてやつた。

しかし、返事はなかつたので、聞こえていたかどうかはわからな
い。

行つたのは行き着けのラーメン店だつた。

早い、安い、うまいの三拍子がそろったこのラーメン屋は、見つけたときから気に入っていた。

店主さんは無口だけど、気さくな人だ。この人柄も気に入っている。

店に入つてから少年をからかうと、お姉さんは意地悪です、といわれた。

表情で「冗談だと速攻でわかつたから、お姉さんは意地悪ですよ」と返した。

この少年は「冗談が下手だ。

からかい甲斐があると少年をからかつていると、店主さんに、年下をいじめすぎだ、といわれた。

かわいいでしょ、と何度も言つてたら、突然店主さんが真剣な表情を作つていた。

今までの話にそんな表情をする場面があつたか、と内心首をかしげていると、少年も微妙な感じで黙つてしまつた。

このままでは埒が明かないでの、冗談で流そうとした。

けど、店主さんはそのまま、少年に向かつて真剣に、このお客さんには惚れてるか、と聞いた。

ちなみに『このお客さん』は私のことだ、と分かつてしまつて、恥ずかしかつたのでちょっと俯く。

そして少年は、はい、と店主さんに氣圧されながらも答えた。するとすぐに店主さんは、このお客さんはやめておけ、と言つた。なんだか水を差された気がしてムツ、となつた自分に驚いた。そしてなんでなのか、問いただした自分にさらに驚いた。

私自身が少年に惚れているかもしれない。

理由を問いただすと、私が追われていることを一発で当てられ、その少年はそんな運命を背負つ覚悟がない、ときっぱり言われてしまつた。

秘密がバレ、少年のことを知つてはいるようこいつ、その両方に怒りを覚え立ち上ると、あんまり熱り立つな、と注意された。

そう言われてハツとした。

馴染みの店の店主さんが、私を脅かすはずはないのだ。
要するに、この少年を想つなら巻き込まないほうがいい、と暗示
していたのだ。

それに気づいた後の私の心は穏やかだった。

店主さんが率先して、少年の気持ちを萎えさせる、私の年齢も話題になつた。

追われていることを看破された挙句、年も看破されてすじい店主さんだと思った。

のはいいんだが、からかわれた。

どうやら茶目っ氣もあるようだ。

今日は警告やアドバイス、気遣いをラーメン代に入れて、2千円を払つた。

バスで今日の礼を言られた。

私も楽しかったから礼を言おうとした時。

会いたくなかったヤツらが視界に入った。

気づかれているのかどうかは、こちらを見ていなかつたので判断しようがないが、早めに出て行つたほうがいいのは明白だつた。

追つ手が来るまではこの少年と過ごしてみたい、と思つていただけに1日もないで見つけるのはショックだつた。

何とかそれを表情に出さず、礼を言つて、早めにここを発つことを伝えた。

そのことを言つたら少年が、少年の家に匿つことを提案してくれた。

本当はそうしたかつたが、少年を巻き込むわけにはいかなかつたので、適当に理由をつけて断つた。

それから無言だつた。

もうすぐでお別れなので時間が勿体無いとも思つたが、少年は話

しかけてこないし、私も話す話題がない。

そうしていろいろうちに、私が降りるバス停辺りまで来ていた。

別れを告げると不安そうな顔をしてたので励まそつとしたら、迷惑はかけられないと言われた。

そんな頼もしくなつた少年を内心、ちょっとびりうれしく、結構さ

びしく述べ、バスを降りた。

第四話 私の過去と宿命

私は家族がいた。

今でこそ独り身だが、ちゃんと愛した夫と子供がいたのだ。
だけど、変な誘拐事件に巻き込まれてからというもの、夫は荒れ
てしまった。

毎日酔っ払って、毎日女と遊んで、毎日殴られた。
毎日殴られた。

青痣ができたり、体が痛んだりして耐えられなかつた。

息子は引き取りたかつたけど、息子を引き取らせなければ離婚は
出来ない、といわれれば頷くしかなかつた。

幸いにも息子には暴力が及んでなかつたので、それで妥協した。

どうか私への暴力が息子に及ばないように、とそう願つて。

私がようやく夫を少しずつ忘れることができ、仕事に身が入り始めた時期のことだ。

仕事帰りの家に帰る途中、家が見えてきたところで子供が目の前にいた。

夜遅くにどうしたの、と訊こうとしていきなり衝撃が走つた。

腹を刺された、と知覚したのは、キラッと刃物が反射したのが見えてからだつた。

あまりの突然の衝撃に悲鳴をあげることもなく、そのまま意識を失つた。

一応、助かつた。

気づいたら、病院のベッドで中だつた。

後で聞いた話によれば、隣の割と仲のいい奥さんが見つけて、通報したそうだ。

傷は深かつたが、出来る限り早く退院し、町を出た。

誰かは分からぬが、とにかく離れなければ危険だと思つたからだ。

それからというもの、そんな子供に見つかっては逃げて。
見かけたら逃げて。
追われても逃げて。

時には裏道を、時には人ごみをかけながら逃げ回つた。

そんな日常を繰り返したある日、とある子供が口走つたのだ。
私の元夫の命令で、私を殺そうとしている。
その子供からも追われ、逃げ切ることはできた。
しかし、それを聞いてから不安になつた。
私と元夫との子はそのとき中学生くらいのはずで、襲撃者は明らか小学生。

なので一応、私の息子はまだ私と会つてないことになる。
だけど、小学生を人殺しにさせるような人と一緒に過ごして大丈夫なのだろうか。
それだけが心配になりながらも、どうしようもなく、ただ願うだけだつた。

そして今、あの少年に別れを告げた。

何となく気になつたあの少年に会つことは、恐らく一度とない。
荷物整理をする。

必要なものは、金品、着替え、携帯食料、スポーツ用手甲、護身用スタンガン、退職届けとアパートの解約届け、帽子とサングラス。大体こんなもんだ。

しかし、準備が出来たからといって、すぐに出るのも躊躇われた。

確かに早く外に出た方がいいに決まっているのだが……。

「私もどうかしてゐるわよね」

そうつぶやいて、ワインを取り出す。
なんとなく、この町にもう少し居たかった。
窓から見える街の明かり、月、漆黒の空。
真下を通り自動車、空に見える飛行機。
せめてあの少年と出合つたこの町を記憶に焼き付けられるよひつて、
景色の全てを酌にワインを煽つた。

不意に

ピンポーン

と音が鳴つた。

誰だらうか？

と、そつ扉を開けた。

そこに立っていたのは、

黒装束に身を包み、刀を腰にさしたあの少年が立っていた。

第五話 父親からの手紙

僕が降りるバス停に着く頃には涙は止まっていた。

初恋といつてもやはり思い出の数がものを言つのかもしれない。
でも……、やはりさびしい。

生まれて初めて僕に普通に話してくれた人が、危機に瀕している
のに、何も出来ない。

…………無力だ。

そんな無力感に囚われながらおぼつかない足取りで家に帰ると、
見慣れない客がいた。

「よう、イマイチ兄貴」

「『機嫌麗しゆう、イマイチ兄さん』

「お前達か……」

数いる弟や妹の中でも群を抜いて、氣に食わない2人だ。
弟の方はフォルテ、妹の方はライラと名乗っている。

黒装束に身を包み、茶髪や金髪が微妙に目立っていないくもない。
それにして学校で呼ばれているあだ名を何故知っているのか。

「兄さん、その反応はひどいですわ。 わたくし達はわざわざあなた

の帰りを待っていたのですよ?」

「僕は待って欲しくなかつたんだけどね

「つれないことを言うなよ、兄貴。父様から手紙をもらってきたよ

「手紙？ 任務なら受けないって言つたはずだが？」

「とりあえず読んでくれよ。俺は渡して来いつて言われただけなんだから」

「ああ」

気に入らない2人だが、確かにここにいるのは父親のせいだ。
この2人は悪くない。

仕方なく手紙を受け取り、開封する。

『お前の町に暗殺対象ターゲットがいることが分かつた。

名前は春日香澄かすが かすみ。35歳の女。

お前にその女を暗殺してもらいたい。

残念ながら写真はないが、一人暮らしだから住所がわかれれば問題ないだろ。

そここの2人には陽動をやつてもらつて、事件が発覚するのを遅らせろ。

これが出来なかつたら、一族から追放する。以上だ』

一枚目にはそんな手紙が、2枚目には目印の入つた地図が入つていた。

任務、か。しかも暗殺。

今まで拒否すれば何も言わなかつたのに、出来なかつたら強制追放か。

追放されたやつは大抵、暗殺対象ターゲットになる。

俺は強くもなければ、頭が回るわけでもない。

要するに殺される。

「暗殺任務だつて。君達が陽動、僕が本丸、だそつだ

「へえ。イマイチ兄さん、暗殺は出来ますの？」

嘲笑しながら問いかける妹。

僕の一族は、殺しが出来なければそういう対象になる。
僕が殺しをしたことがないから、僕もその対象ではある。
ここで出来ないというのは簡単だが、追放される可能性が高いので嫌でも嘘をつく。

「問題はない。だけど僕が本丸でいいのか？ どう考へても君達の方が向いてると思うけど」

「確かにそうですわよね」

「どんな意図があるのかは知らないが、3人でやるんだつたら確かにライラが陽動、俺と兄貴が本丸をやつた方がいい。
しかし、父様の命令なら逆らうわけにもいかない。
そんな疑問を抱くだけ無駄だ」

確かにそうだ。それなら好都合だ。
僕は人殺しなんかするつもりはない。
だから暗殺^{ターゲット}対象は逃げてもらう。

幸い、写真はないみたいだし、住所以外の情報が載っていないから、住居を変えればしばらく大丈夫だろう。
そして……、僕は死ぬつもりだ。

「さうですね。それで、時間と場所はどうしますの？」

「それは手紙に書いてないんだけれど」

「じゃあ、俺達で決めろってことなんだろ。

俺とライラは街で暴れて周囲の目をひきつけて、冗談がその間に本丸を叩く。差は1分、誤差は30秒以内。

場所は警察署の周辺、かつ人通りが多いところがいいと思つんだが

時計を見る。6時か……。

「じゃあ、時間は7時、場所は菅原駅がいいと思つ。
7時の菅原駅なら人通りも多いし、警察署も近いし十分目立つと思つよ。

それに僕の心が変わらなければやりたい

「通信機を渡しておく。殺せる状態になつたら連絡を入れる。
タイミングを合わせる」

「分かった

「それでまじきげんよ！」

「んじやな。装備はここに入ってるぜ！」

そう言つて置き土産をおいて、去つていぐ2人。

とりあえずその装備とやらを見てみると、黒装束と刀。

……まあ、僕に任せることとは相当弱いんだろう。

仮に強かつたら、こんな装備では勝てない。

剣道はやつたことあるんだが、竹刀と刀はかなり違うから役に立たない。

「とりあえず、着替えて行くか

着替えない方が、ターゲット暗殺対象に信用されるが、ターゲット暗殺対象を逃がすために話で時間を稼ぐ必要がある。

黒装束を着ないと、その時間も稼げない。

黒装束に着替えるために、家に入った。

第七話 お姉さんとの再会

ピンポン

自転車を漕いで、ここまで来た。時間は6時半。
じへ一般的なアパートの一室にあった。

暗殺をする場合、一番適しているのははずれの一軒家と親に聞いたことがある。
どうでもいい知識だが、理屈は近所の人にはづかれにくいからだ
そうだ。

「はーい、どちらまでですかー」

チヨーンロックをかけた状態でドアから見えた顔に思考が止まつた。

それは向こうじゆうだ。

口をぽかーんとあけて、ぼうっとしている。

そして数秒間、時が止まったように全てのものが止まつた。

そこにはいたのはバスで会っていたお姉さんだったのだ。

先に動き出したのは、お姉さんだった。
ガチャンとドアを閉める。

.....。

そりやそりだよね。黒装束に刀だからね。
やつぱり服装に気を使えばよかつた。

「あのー、お姉さん？」

「あなたまさか、豪の命令で来た子？」

「そうですが……、すいません、そのままいいので話を聞いてもらえませんか？」

いかんせん、時間はあと30分しかない。

いや、大目に見ればもっとあるんだろうが、逃げる時間もある。

「…………、」こは3階だから逃げ場はないのよね。

いいわ、聞いてあげる

「ありがとうございます」

1階か2階だったらマズかつたな、と思いつつ続ける。

「まず、僕はお姉さんに危害を加える気は全くありません」

「…………」

「今回のお姉さんの追跡者は3人です。内2人は陽動で菅原駅にいます。

作戦決行、つまり駅で騒ぎを起こし、かつあなたを暗殺する時間は7時です。

それまでに、電車は使わず逃げてください

「…………」

「バイクでも車でもいいですが、高速道路は使わないでください。うちの家族って何か異常で、高速道路の料金所のカメラの映像とか普通に見れるので場所が特定されます」

「…………」

「僕がいたら、出れませんよね。

僕はもう帰りますから、お姉さんも早く逃げてくださいね。

……今度こそ、やよいひら

そう言つて立ち去る。

もつと言つたことはあるが、お姉さんにも迷惑だし、逃げる時間は早い方がいい。

さて、あの2人にはどういいわけするか……。

「待つて」

お姉さんの隣の隣の部屋のドアの前辺つままで歩いたところで、そういわれて振り返る。

ドアを開けて、お姉さんが出てきていた。

「お姉さん、早く逃げないと……」

「その前に2つだけ聞かせて」

「…………いこですよ」

「……」が迷つたが、今までの経験からお姉さんに口で勝つた事はない。

説得するよりは質問に答えたほうが早く逃げてくれそうだ。

「なんで私を助けるの？」

「僕は人殺しなんてしたことがないですし、これからもしたくないからです。」

対象がお姉さんなら、なお、ですか？」

「…………、あなた、一郎？」

「はい、やつですか？」「なんで僕の名前を？」

「本当に？」

「はい」

僕の疑問はスルーみたいだ。

そう思つてると、お姉さんが駆け寄つてくる。
そして、抱きしめられた。

…………え？

いきなり何を……、といつ言葉を飲み込んだ。
なぜならお姉さんが泣いていたからだ。

戸惑いながらも、抱きしめ返す。

背中をさすりて、お姉さんが泣き止むまで待つた……。

「もう大丈夫よ、ありがとう」

「いえ、これくらいこならへんでも……」

「……、ねえ一郎君。落ち着いて聞いてくれる?」

「はい」

名前を呼ばれてドキッとした。

お姉さんにはキミとしか呼ばれていなかつたからか。
やつは、お兄じこで名前も知らなかつたのか……。

「実は私、一郎君のお母さんなんだ」

.....
は?

第七話 逃走

お姉さんの言つてこる意味が理解できなかつた。

お姉さんが僕のお母さん？

いやいや、そんなわけがない。

「マジですか？」

「ええ、本当よ」

だそうです。

いや～、それにしても行方不明の母と会つなんて、奇遇ですね。

……え～？

いやいや、マジ？

「親子の感動の再開。 今のお気持ちはどうですか？」

ハツとして後ろを見てみると、ライラ。

「ライラがなんだ」「ここ……」

「残念ですわね、兄さん。この手紙をよく見てくださいませ」

距離があるのでよく見えないが、先ほどの手紙と変わらない気がする。

つていうか「ハハ箱に捨てたのこ、ここあるのせ回収して始めたのか。

こりこり、苦労してると思つ。しばら見てみると、父親の手紙の証である印鑑が口紅に変わつていい。

……考えなくとも、ライラのだね。

つまり、手紙自体が偽物で作戦も何もない、ということだ。

「そういえば、お前は『偽り』が得意だつナ

「覚えていただけたのですね。光榮ですわ」

「まあ、もういわけだな」

後ろに振り返る。

そこにはフォルテがいた。

「挟み撃ち……か。やられた」

「待つて！ あなた達の目的は私なんでしょう？」

「この子に手を出さないで！」

「残念ですね。兄さんがあなたに手をかけたら見逃すつもりでしたから」「

「お願ひしますー。」

近くで何かが動いたと思ったら、お姉さんがフォルテに向かって土下座している。

「お、お姉さん、僕は別に……」

「やつですわね。今更そんな……」

「いや、やうだな。兄貴が春田香澄をここで殺せば、見逃す」

まつちぐいちを見て、吉川オルテ。

「やつですね。それなら面白がりますわね」

トライラも乗り気だ。

「いいわ。一郎君、私を斬つて」

「え？」

「このままじゃ、どっちみち2人とも死んじゃうわ。
だったら、一郎君だけ生き残つて……」

確かに、そうだ。

アパートの廊下とこいつ道が2方向にしかない場所での挟み撃ち。
逃げられない。

相手が戦闘員2人なのに対し、こちらは非戦闘員が2人だ。勝てる道理もない。
でも……、

「やつぱつそんなことできないですよ

「一郎君、お願い！　あなただけが私の希望なの！」

必死な顔をして、懇願される僕。
けど、やっぱりそんなことできない。
何か方法はないのか……？

「さあ、どうしますの兄さん？」この方と一緒に死ぬのですか？

「俺はどうでもいいぜ。好きにしな」

「……」廊下。道は一つ。

……いや、道は二つもあるー

「そんなこと……　できないー！」

田の前のドアを開き、お姉さんの手を引っ張って中に入る。
開いてなかつたらどうしようか、と心配だったが、どうやら大丈
夫だったようだ。

「え、一郎君、リビングの家……」

「命がかかってるのに、そんなこと僵つてる場合じゃないですよー！」

お姉さんを速攻で説き伏せて、ドアの鍵を閉める。
リビングまで一気に入る。

「 もやあつー 誰ー！」

「 すいません、追われてるんで勘弁してくださーーー。」

「 本当にみんなさい。春日と申しますが、2つ隣の部屋から何でも持つてつていいのでーーー。」

「 いつも言つてゐる間にカーテンを引っこ抜き、互いに結ぶ。そうしてゐる間に、ドアからボンッ とすじこ 音が鳴る。どうやら、破壊を試みているようだ。
防犯扉といえども、フオルテの前では無力と考へるべきだ。
あと、2発持てばいいほうだらけ。」

「 どうやるの? 」

「 体に結んでください」

カーテンを3つ連結させたといひで、体に巻きつけ結ぶ。
その間にまたドアが鳴る。

「 すいませんが、警備隊呼んでもらえませんか? 」

「 ええ、分かりました」

警備隊とは、ヒリート集団の警備隊である。
全5人で構成される集団で、警察ではないので民営だが、かなり

の実力と迅速な対応が売りである。

といっても、本部はここから遠く離れた場所だ。

2県もまたいだところだが、その場所からなら曰く、3分で来れるらしい。

呼び方は簡単で、警備隊で配布されているアクセサリーを購入し、スイッチを入れるだけである。

GPSで追跡してくれるので、誘拐されたときにも使える優れものだ。

まあでも、3分もかからずここを去るから、役に立たない可能性が高いが。

アクセサリーをもらいうわけにもいかないし。

「結んだわ

「よし、飛び降りますよ」

窓を開け放つて、ベランダに出る。

お姉さんを先に逃がすには、お姉さんを先に1階に下ろす必要がある。

1階ずつ降りていくとして、ここは3階だから、僕が先に飛び降りた方がいい。

「お姉さん、手すりにつかまつてくださいね」

「うん、無理しないで」

「無理しなきや、逃げられないよ」

そう言って、飛び込む。
そのとき、ドガーンという音と、キヤアという悲鳴が聞こえてきた。

急がないと。

少し落下して、腹にやわらかい衝撃が走る。
田の前には2階のベランダで、カーテンの長毛はちょうど良かつたようだ。
すぐにベランダに入り、

「お姉さん、飛び降りて！」

「頑張つてね」

僕の方は3階から2階、2階からと1階ずつ飛び降りてるけど、
お姉さんは3回から1階に一気に2階飛び降りなければならぬことに気がついた。

だったら、お姉さんを先に飛ばせておくんだった、と後悔したところで、再び腹にやわらかい衝撃が走る。

即座に刀でカーテンを切り捨てる。

「お姉さん、先に逃げて！」

「でも……」

「時間がない！」

カーテンを放りながら、手すりに手をかけ飛び降りる。

もう飛び降りてゐるのだから、今お姉さんが逃げてもそんなに距離は変わらないけど、少しでも距離を開けないと……。

地面が近づいた瞬間に壁を蹴り、父親に習つた受身で、回転して衝撃を少し消す。

……2階から降りるのは初めてだが、どうやら無事だつたようだ。前方を見れば、お姉さんが顔はこぢらに向けながら、走つてゐる。

「なめてんじやねえ！」

ドシンという音と共に、少し離れたところでフォルテが着地する。フォルテの能力は『属性付加：硬』。

自身の体、あるいは周りの何かを硬くさせらるらしい。故にこうこう衝撃にはめっぽつ強い。

「私達から逃げられると思いまして？」

フォルテとは対照的にトンシ、とこう音とライラが共に着地する。

ライラの能力は『属性付加：偽』。

さつきの手紙に使つた能力だ。何かを偽るという能力。

多分、着地に能力は使つていない。

うまく2階のベランダの手すりに着地して、衝撃を和らげたのだ
う、と推測する。

「逃げられると思つんじやなくて、逃げたいんだよー」

そういうて、一田散に背中を向けて逃げる。
僕も卓球部の端くれだ。逃げるくらいなら……、と思つてゐる。

「失せろー。」

後ろを振り向くと目の前に拳。
慌てながらも、卓球部で鍛えた反射神経で刀を抜刀し、受け止める。

「キツ

拳からそんな、骨が折れる音がする。

「んなつー。」

驚きでフォルテの目が見開かれる。
その隙に、受けた刀を流すようにして、足に斬りつける。
ドバッ、と鮮血が舞う。

「フォルテ様！ おのれ、こしゃくなー！」

そういうて、背中のレイピアを抜いて、顔面に刺突を繰り出す。
しかし、前情報で他の兄弟から、こんな情報を聞いたことがある。
『ライラの初撃は属性付加(エンチャント)を剣にかけて、顔面に刺突するように見せかけて、心臓に刺突を繰り出す』

そんな情報だ。

まあ、体格的にも相手の体は僕の胸ほどしかない。顔面を刺すの

は至難の技だわ。

田の前に迫るレイピアを無視するのはかなり苦労するが、一応、この兄弟ほどではないが訓練は受けている。

心臓の前に刀を滑り込ませると、見えないレイピアを刀の腹で受け止めた。

いくらフェイントだろうが、事前に情報があれば、怖くないということが証明された。

しかし、冷や汗を流さすにはいられない。

「やつ！ はつ！」

しかし、レイピアの特徴はスピードだ。

心臓を突いた初撃が終わった瞬間に次の刺突が来る。

刺突といつても、『属性付加・偽エンチャント』のせいで、見える刺突とは違うところに見えない刺突が来る。

後ろに下がりながら、そこに刀を間に合わせはじく。何故、そんなことができるのか、と言つたら曰だ。

確かに、刃は見えないが、目が攻撃する方に向いているのでよくみればバレバレである。

目の方向の急所に刀をすべり込ませれば、防げるというわけだ。

しかし、基礎ポテンシャルが違いすぎる。

あちらはスピード、パワー、持久力、全てが勝つてゐのに、こちらは体格でしか勝つていない。

刀であることも問題だ。刀は曲がっているが故に、受けには向いてない。

徐々に追い詰められていく……。

「ライラ！ 春日香澄の追跡は大丈夫か！」

「いえ、大丈夫ではありませんが、兄さんを生け捕りにすれば、この町から出られないでしょう。

その内に、見つければよろしいと思いますわ」

「このつ！」

簡単に警戒が解けているわけではないが、会話に何割かは意識を割いているはずなので、レイピアの腹に蹴りを入れる。

つていうか、お姉さんの心配をするつてことは、お姉さんが暗殺ゲット対象だったのは本当だつたのか。

ピキッ

そんな致命的な音が、レイピアから漏れた。

「え、そんなまさか！ わたくしのレイピアが蹴りごときで折れるなんて……」

そう声を出した瞬間、通信機を投げつけて、脱兎の如く逃走する。通信機にGPSがついている可能性があつたからだ。

そして裏道に入る。あの2人は街中でも普通に騒ぎを起こす。

当然、ライラとフォルテの身体能力の方が勝るのだが、ライラの武器は折れ、フォルテは負傷している。

一方、僕は刀もちだ。念のため、振り返るが、2人とも追いかけでこない。

実際、フォルテの拳は怪我をしていないし、ライラのレイピアは折れない。

僕の『属性付加：音』で、そう錯覚させたのだ。

兄弟の中でも長男のくせに弱いのは、ここにあった。

弟達は3歳から学校などにもいき、ひたすら訓練しているから元の身体能力も劣っているが、超能力面でも劣っている。

弟達の超能力はすぐくて、武器から炎が出たり、ありえないくらい攻撃や機動が速くなったり、フォルテみたいに硬くなったり、ライラみたいに手品師みたいなことなど、全部戦闘で役に立つ。だが、僕の場合は、ただ音が出るだけだ。

そりや、弱いはずだ。

武器を打ち合わせても、リンッとか「ーン」とか鳴るだけで、学校のことを考えながら訓練をやつたときなんて、武器を打ち合わせた瞬間、学校のチャイムが鳴って、その場にいた他の弟妹に笑われたものだ。

しかし、この戦闘では訓練時には考え付かないような使い方をすることができた。

一つ目はフォルテの拳。

フォルテの拳と僕の刀を打ち合わせたときに出了骨の折れる音は、『僕の属性付加：音』の能力で出したものだ。

能力とは意識で左右されるもので、自分の硬さに絶対の自信を持つていたフォルテと戦つたら勝てるわけもない。

そこで、骨の折れる音を出すことで、驚愕と不信を抱かせた。

そして、自分の硬さに自信がなくなったフォルテの足を、難なく斬れたというわけである。

一つ目はライラのレイピア。

これは簡単に、相手の武器を壊れたと錯覚せることで戦意喪失を狙つた。

ただし、レイピアと刀を合わせたときにはると、刀が折れたと勘違いされてしまうので、わざわざ蹴りを放ったわけである。まあ、レイピアを見れば、すぐにバレてしまうような小細工だ。すぐに追つてくるだろう。

「待ちなさい！ よくもこんな小細工を…」

「許さねえぞコリカー！」

ほらね。

フォルテが刀傷を負っているのに走れているのは、ライラが何かしたのだろう。応急処置も訓練で教わる。すぐに追つて来ているが、それでも100mほど距離を稼いだ。近くのゴミ箱を倒して、中のゴミに属性付加を加える。

あの2人は、しょぼいバリケードぐらいにしか思っていないだろう。その予想通り、普通に突っ込んでいく。だから、僕の罠に嵌る。

ドガアアアアアアアアアン！――！

後ろを振り返ると、2人が身を硬くして、立ちすくむ。

しかし、何も起こらない。

当然だ。

ゴミに属性付加をかけて、ゴミを踏んで出る音を爆発音に変えたんだから。

それから何回か、爆発音が鳴り響く。

「くそつ、あの野郎！」

「許しませんわ！」

しかし、まだ振り切れない。
あっちの方が走る速さも、持久力も上なのだ。
もつと妨害する必要がある。

近くのゴミ箱から丁度上にあった、歪んだスーパー・ボールを手に
持ち、残りを全てばら撒く。

「何度も同じ手が通用すると思つなよー」

それは、どんなことがあっても何も起こらない、と確信してると
いう意思表示だ。

確かに何も起こらない。

でも、それが分かつても、この条件反射には逆らえない。

キイイ、イイ、イイイイ、イイイ、イイ

そんな耳障りな音が辺りに響く。

僕はあらかじめ、耳をふさいでいたので大丈夫だが、後ろの2人
はどうだろうか。

振り返らなくても分かる。2人は一瞬でも耳を押されて、しゃが
んでいただろう。

この音の正体は、黒板を引っかく音だ。

皆さんも経験はあると思ひ。

「あああああー！　うぜえ！　逃げないでかかってきやがれ！」

「追いついたら覚悟しなさいー！」

そんな後方の叫びを聞きつつ、すぐ傍のカドを右に曲がる
丁度いいタイミングで丁字路になっていた。
これを左に曲がり、その時にスーパー^{エンチャント}ボールを右に投げる。もち
ろん属性付加はつける。

ボールがバウンドする度に、タツタツタツ、と走る音が響く。
これで足音では、どっちに曲がったか分からないはずだ。
後方に2人が見えないうちに、見えたカドを右に曲がる。

「くそっ、どうしたにいきやがったー！」

「足音がじまかされていますわね。フオルテ様は右を、わたくしは
左を探しましょー！」

「分かった。何かあつたら連絡しろ」

「はい、仰せのままに」

2人の声が反響して、僕の耳に響く。
……、もしかしたらこれは、僕の足音もかなり響いてるかもしれないな。

それはそれで、大変だ。

こればっかりは、さつきの爆発音で聽覚がひるんじることを願う

しかない。

そんなことはかなり楽観的な考えつていうのは、分かつていたんだんだけど……、

「見つけましたわ！」

見つかってしまった。
しかし、まだ遠くだ。

「フォルテ様、兄さんを見つけましたわ。場所はわたくしの走っている方向の少し前でござります」

やばい、フォルテに連絡を取られた。
これは事態が悪化したかもしれないな。
しかし、どうすればいいんだ？

やばいやばいやばい。全然思いつかなくなってきた。

不意に

ブオオオン

というエンジン音が聞こえた。

そりゃ！ 誰かの車に乗せてもらひやばいのか！
すぐに表通りへと、進路を変えた。

「！！ マズいですわ、フォルテ様！ 兄さんが表通りを目指しましたわ！」

乗り物で逃げるつもりのようになります」

読まれた！

仕方ない、後は全力あるのみ。

車にさえ乗れれば、僕の勝ちだ！！

第七話 逃走（後書き）

やつぱりあと一話の予定です。

申し訳ないですが、5／12に完成予定とします。

今は眠気と戦いながら書いてる状態で、効率が悪く、11日もバイトなので時間がとりづらいので。

12日もバイトはありますが、1日1話アップできるように頑張つてみたいと思います。

第八話 爆走

よし！ 追いつかれる前に表通りに出れた！

辺りを探すと、バイクに乗つてエンジンをかける女性が見える。この際誰でもいい！ バイクに乗せてくれ！

と思ってバイクに駆け寄ると、ヘルメットを放ってきた。
へ？ と思ってよく見てみると、ヘルメットの透明部分が黒っぽいから分からなかつたが、お姉さんだ！

「ほつとしないで！ 早く乗りなさい！」

「はい！ すいません！」

刀を納め、ヘルメットをかぶり、後部座席に乗る。来た道を見てみるとライラがチラシと見えた。

「バイク！？」

「OKです。出してください！」

「じっかりつかまってなさい！」

「はい！」

実は女性をこうして抱きしめた経験はない。微妙に照れる。

発つバイクにライラが追いすがるが、身体能力が高いといつても、

所詮は人間の小学生だ。

追いつかれそうになつたのは、出始めだけで、加速するとドンドン離れていく。

「よし！ 振り切つたわね！」

「まだ安心しない方がいいです！ まだ何があるかも知れません！」

「分かつたわ！」

しかし、そういう矢先、

「くっそ、ここの野郎！ とまりやがれ！」

「まだいたのか！」

フォルテが車道に躍り出た。

これがライラだつたら突つ込んでも大丈夫なんだが、なんせ3階から飛び降りても、刀で斬りつけても大丈夫だつたフォルテのことだ。

「Jのまま突っ込むのは危険だ。

「あいつは素手でバイクを止められます！ 避けてください！」

「そんなこと言つたつてこのスピードじゃ……、いえ、しつかりつかまつてなさい！」

そういつた途端、キィイイという音を発しながらバイクが向きを

変えていく。

何とかギリギリ、フォルテの手が届く前に、向きを変えきり、ロターンにして今来た道を全力で突っ走る。

「くそつ、待ちやがれ！」

その言葉を聞きながら、バイクはひたすら進んだ。

「やつと逃げ切れた！」

「多分、大丈夫だと思います！」

バイクのエンジン音がつるつるなので、いちいち大声だ。

「これからどうするー..」

「分からぬですー..」

実際、こんなことはしたことはない。
少なくとも、もうお姉さんの家にも、僕の家にも戻れない。
新たな生活をしなければならないのだ。

「とりあえず、行きたいところあるー..」

「じゃあ.....」

と言いかけたとき、

ブロロロロロロロロ

というエンジン音が聞こえてきた。

嫌な予感がしたので、振り返ると大型バイクにフォルテとライラ
が乗つて追つて来ていた。

ヘルメットもつけてない。

「待ちやがれええ！！！」

「しつこつー」

まだ追つてきてたのか。
さつきので諦めて欲しかった。

しかし、こつちは中型バイクで大人+高校生。
あつちは大型バイクで小学生×2だ。

重量差も馬力も絶望的過ぎる。

「お姉さん、やばいですよ。 大型バイクで追つてきました！！！」

「分かってるわ！ でもどうすればいいのー！」

それは…… そうだよね。

戦力差が圧倒的で、全然お話にならない。
僕の能力も役に立たないし。

「何か出して欲しい音つてないですかー！」

「なんでー！」

「僕は僕が聞いたことある音だつたら、出せますー！
何とか追い返せる音とかないですかー！」

……でも、ないだろ？。

爆発音はもうダメだろ？。

黒板の引っかく音もバイクの音がうるやくて聞こえない可能性が

高い。

あとは、

あとは何かないのか？

そう思つていると市街地に入る。

「パトカー！」

「へ？」

「パトカーのサイレンとか鳴らせるー。」

「やつてみますー！」

裏路地でなくとも、市街地なら視界を防ぐ場所なんていぐりもある。
大きい建物の十字路を曲がり、

ファンファンファンファンファンファン

余談だが、属性付加^{エンチャメント}という代物は、自身か或いは自身の周りに何かをつける能力である。

当然音は、物体にそのまま付加しても意味ないので、足に属性付^{メント}加をつけてバイクのサイドをパカパカと蹴っている。

ふと、後ろを見る。

キイーー、ブロロロロロロロロロロ

2人はしつかり追跡していた。

……、まあ分かつてはいたんだけどね。

「撒けませんでしたね！」

「どうするー！」

つていうか、警察はまだなのか？

ヒトの家不法侵入して、普通のバイクで一人乗りをし、法定速度をぶつちで抜いているのに……。

日本の警察は大丈夫なのだろうか？

まあ、警官が減少しているのが原因なんだろうけど……。

と、いけない。

警察が来るか来ないかを考えてもしょうがない。

来るときは来るし、来ないときは来ない。考えるだけ無駄だ。

かといって、他に何かあるわけじゃない。

徐々に追いつかれてるし、どうしよう？

「何か、いらないものありますか！」

「どうしてー？」

「いや、投げて当たらないかな！　とー」

「冗談言わないで！」

いや、本気だつたんだけビ……。

でも、投げるものがあるわけでもないし。

お姉さんはそこいら辺のドライバーよりは全然いい動きをしていた。小回りを利かし、どんどん道を曲がり引き離そうと試みていた。

しかし、やはり性能の差か。

ついに、真横ぴったりまで追いつかれてしまった。

「うーー わざわざ止まるのですわー！」

「お断りだ！」

バイクの上の戦闘だ。

ライラはレイピアを、僕は刀を取り出し、互いに斬りあっている。運転席も、いろいろな技術を駆使し、距離を取つたり、詰めたり、蹴りを入れたりしている。

「せつせとくたばれ！」

「あなた達こそ、早く帰りなさい！」

しかし、戦況は明らかだ。

まず、こちらにはフォルテに対する攻撃手段が存在しないのに、あつちは普通にお姉さんを攻撃できる。

お姉さんは必死にかわしているが、徐々に切り傷が増えてきて時間の問題なのが目に見える。

それに刀は両手用の武器だ。当然、片方の手でお姉さんにつかまっているため片手で刀を振っている僕は満足に振れない。対してライラのレイピアは片手用だ。故にキツい。

そんなことを考えていると、

「もうつた！」

「くつ、しまつた！」

持ち手を斬られ、刀を落としてしまった。

カラーン、という落下音が哀愁を漂わせる。

幸い傷は浅いが、武器がない今、なんの慰めにもならない。

「死になさい！」

そういうて、大きく腕を引く。

バイクもガードレールいっぱいに追い詰められているため、距離の空けようはない。

.....もうダメか？

第八話 爆走（後書き）

もつひよいです。意外とバイトがある日の1日1話アップはキツい
……；

頑張って最終話も鋭意製作中です。

出来るだけ早くしているのですが、どこまで書けばネタバレしにく
いか、とか計算するどどうしてもスピードがあ……、言い訳はよく
ありませんね。

一応は順調に進んでいるので、速ければ夜の間に、遅くとも明日中
にはアップできる予定です。

第九話 逃走の終わりと新たな生活の始まり

最後は……、情けないとつたが目をつぶつた。

もう防ぐ手段はない。

小学生だが一般人ではない、という常人を超えた弟と妹からこれだけ逃げただけで奇跡だ。

あとは、頑張って警察が捕まえてくれることを祈るしかない。

……。

……。

……。

あれ？

いつまでも、来るべき衝撃が来ない。

お姉さんが斬られたか？……とも思ったが、バイクがぐらついてないなら、それもないだろう。

じゃあ、どうしたのか？

時間が止まったのか？いや、まさかマンガじゃあるまいし。どうなったのか、気になつて目を開けてみた。

僕たちが乗るバイクと、フォルテとライラが乗るバイクの間に金属の鋭い何かが見えた。

恐らく、これが最後の一撃を退けたのだろう、といつゝことが何となく予測できた。

その金属の何かの根元の方を辿つてみると……、

「自転車？」

いやいや、そんなわけがない。
今は絶賛爆走中の法定速度ぶつけで、100km/hは出でてゐるはずだ。

それこそマンガじゃあるまいし、だ。

「警備隊隊長、かんさき ゆうすけ神崎雄介だ」

「同じく警備隊戦闘班、みゅうへん ちか二浦千佳」

警備……隊？

「そここの2台。5秒以内に止まらなければ、実力行使で止めな

は？ 実力行使？

「5！」

カウントされて慌てた。

「あ、お姉さん、止まつましょー！」

「4！」

「色々とグレーゾーンだけどつかまらない、つてことはないわよね！」

「3！」

「どうちみち警備隊相手じゃ逃げ切れないです！ 素直に止まりましょう！」

「2！」

「分かったわ！」

キィイイイ、という音を立てて減速するバイク。
それに並んで、隣のバイクも減速する。
向こうの2人も逃走はできないと踏んだようだ。
降りたら片をつけれる気か？

「よし、いい判断だ。全員、降りろ。抵抗すれば、無傷で済む
保障は出来ない」

……まあ、元より抵抗する気はない。乱暴な気はあるが。
おとなしくしたがって、降りる。

普段つけないヘルメットが邪魔だったので、ついでにひとつて後部
座席に置く。

お姉さんも同じようにして、ヘルメットをカゴに入れる。
フォルテとライラも、素直に降りる。

その間に三浦千佳と名乗った女性は、周りにカラーボーンを置い

て道をふさいでいる。

「一応、バイクの鍵を預かっておぐ。」
「渡せ！」
お姉さんがバイクのキーをとつて、神崎雄介と名乗った男性に渡す。
「フォルテも同じように渡して……、

「食らいえー！」

「危ない！」

神崎さんに殴りかかった。

フォルテの拳は神崎さんの鳩尾に入る、

「ぐあっー。」

「抵抗はするな、と言つたはずだが？」

と思いつかず、その手首を掴んで背負い投げをした。

片手でバイクの鍵を持っているから、片手で投げたことになる。

フォルテは属性付加エンチャントで、身体的ダメージはないだろうが、不意打ちを避けられたのだ。

抵抗する気はなくなつたに違いない。

。。。。。。。

「次の事件か。千佳、ここは任せられるな？」

「もちろんです、隊長！　3時間以内に任務を遂行し、帰還することを約束致します！」

「よし、いい返事だ。では諸君、私は失礼する」

警備隊の隊長はバイクの鍵を三浦さんに渡してそういう残し、自転車にまたがつて瞬く間に見えなくなつた。比喩ではなく、本当に瞬いている間にいなくなつた。

三浦さんは隊長がいなくなるのを見送ると、一いち方に振り返る。その瞬間、ライラが動き出した。

レイピアを片手に

「痛つ」

「隊長と違つて手加減できないから、次は腕は斬り飛ばす」

胸を突くと思った瞬間、レイピアは吹っ飛んで、ライラの手からも血が出ていた。ライラもかなり驚いている。

まあ、隊長が印象的だったために、隊長が強くても隊員はどうか、というのはあった。しかし仮にもエリート集団の警備隊だ。その判断は誤りである。

三浦さんの方を見れば、血が滴つてている刀を握っている。

刀の方を見ていると、三浦さんが刀をハンカチで血を拭いながら近づいてくる。

「車道に落ちてたけど、返すの忘れてた。返す」

「あ、ありがと」「やれこまか」

刀は別にどうでもよかつたが、後で換金すればいいか、と受け取る。

「今はあなたが持つより、そこのあなたが持つ方がいい」

「私が、ですか？」

「銃砲刀剣類所持等取締法、18歳未満の少年少女に所持の許可を出してはいけない。」

「これから警察が来るから」

どうやら18歳未満に見えるらしい。

そんなに童顔に見えるだろうか。

これでもあと3ヶ月で18なのだが……。

事実なんだから、素直に渡すしかないんだけど。

「そうですね。じゃあ、お姉さん、どうぞ」

「え、ええ」

そういうて、恐る恐る刀を受け取る。
まあ、初めてなら仕方のない反応だ。

「「」の中で春田つて誰？」

「私ですが……、何でしょうか?」

「あなたの家の2つ隣の伊吹さんに家の物あげる、って言った?」

伊吹さんが誰かは分からぬが、それらしき発言をしたのは不法侵入したときだ。

すっかり忘れていたが、確かにそんなことをいった。
でも、僕の家族に狙われてて、その中のたつた2人を無力化しただけだ。

知られている家に戻ることはしないだろう。危険すぎる。
そういう理由で家に戻れないから、あげても問題はないだろう、と思う。

まあ、僕がそう思っただけでお姉さんも同じ考えとは限らないけど。

「はい、いいました」

「いいの?」

「はい、女に一言はありません」

「分かった。じゃあこれにサインして頂戴」

「ええ、分かりました」

そういうて、三浦さんに渡された紙にサインを書くお姉さん。
あの2人も今は悔しそうにだまつてみてる。

「よし……」

ファンファンファンファンファンファン

パトカーの音が鳴り響いてきた。
やつと来た……。

出来れば、追われてるときに来て欲しかった……（切実

「田村刑事だ。三浦警備隊員、ご苦労だ」

「12秒遅刻。もつと早く来なさい」

じゅ、12秒つて細かい……。

分のスケジュールを組む人は知ってるけど、秒のスケジュールつ
てのもいたんだ。

「上司じゃないあなたに言われたくない」

「文句は受け付けない。

これが、バイク盗難の被害者の住所と電話番号、不法侵入の被害
者の住所と電話番号。

こっちが、不法侵入被害者への損害賠償支払いの受託証。
そこの子供2人は不法侵入、器物損壊、窃盗、殺人未遂、無免許
運転、刃物所持、スピード違反の罪を犯した。当然逮捕対象。

こっちの2人は、不法侵入とスピード違反をしたけど、逃げて
しうがなかつたし、不法侵入は損害賠償支払ってるし、減点くら
いでいいかと」

改めて2人の罪の多さを知った。

実際は殺人などもやっているはずだ。警察に証明できなきや意味

ないけど。

でもこれだけの罪を犯すと、罰はどれくらいになるのだろつか？

それに、僕たちも罪を犯したのか。

それを三浦さんがかばってくれている。……ありがたい。

「……、そうだな。

そこあなたのあんた、免許を拝借してもいいか？」

「ええ、どうぞ」

「よし、青木。 減点の処理しどけ」

「はい」

そう言つて、刑事さんは免許を受け取り、青木さんに渡して減点の手続きをする。

その間に三浦さんが口を開く。

「そここの2人は厳重注意。油断は禁物だから」

「こんな小学生なのにか？」

「見た目は関係ない。それはあなたが一番知っているでしょ？」

「……ああ、そうだな」

確かに超能力の行使に見た目は関係ない。

僕も曲がりなりにも超能力は使える。しょぼいけど。

それにしても、刑事さんは素直に従うようだ。
超能力者を逮捕したことがあるのだろうか？

「じゃ、後は任せるから。」ひの2人は回収するかい

「いや、そここの2人も証人として、任意同行を願いたいのだが

「任意同行なら拒否できる」

「ぐつ。 正式な手続き踏んだら、……いいな？」

要するに、あの2人が裁判所で正式な書類が作られるときこそ、証人として後で来いということなのだろう。

いろいろと面倒だが、この際仕方がない。
でも、あんまり目立つと他の兄弟に見つかるからなあ。

「分かりました」

「なら、いいけど。じゃ、パトカー貸して」

「えつ、パトカー借りるんですか？」

「いや。でも疲れたし、眠いし、たいちょーに置いてかれたらし

な、なんか三浦さんのイメージが崩れてく……。

最初は『もちろんです、隊長！ 3時間以内に任務を遂行し、帰還することを約束致します！』とかそれらしいことを言つてたのに、言葉も態度も悪くなつてきて。

まあか、あの言葉遣いは隊長に対してだけ、とか？

「チツ。……まあ、いい。青木、三浦を送つてやれ」

「「」の2人も一緒に

え？ 聞いてないんですけど？」

そう思い、お姉さんと田を合わせる。
他の兄弟に見つからないようつにするために、お姉さんの家にも僕の家にも帰れない。

だから今日は、部屋を探したり、田用品とかそろえたりしたいんだけど……。

お姉さんも田では、同意見のよつだ。多分。

「「」の後はこいつあるので……」

「「」を何とか。お金出すし、泊めるし、食事つけるし」

お金とこう言葉に反応する僕。

今までギリギリの生活してきたから、今の財産は5万円ほどと日本刀ぐらうだ。

それに、1日とは言え、宿泊費と食事代も浮く。
お姉さんを見ると同意見のよつだ。互いに頷く。

「分かりました。一緒に乗ります」

「ありがと」

「3人でいいんですね。じゃあこちりに乗ってください」

そうしてパートカーの後部座席に乗り込む。右から順に、三浦さん、お姉さん、僕だ。

「ここから何分?」

「分かりませんが、今の時間は渋滞しますからねえ。結構時間かかると思いますよ」

「それじゃ、困る。サイレン鳴らして走つて」

「ははっ、それは流石にダメでしょ?、といいたいところですが、僕も早く帰りたいので鳴らしちゃいます」

……意外とサイレンが軽いノリで使われている。

車が次々と左右に避けるさまは、えらい人が通るみたいだ。

「事情とか、着いたら聞くから」

「え? 移動してる間に聞かなくていいんですか?」

てっきり、すぐに今回の事件の説明を求められると思つたんだけ
ど……。

「2日寝てないから眠い。今は寝かせて」

「やつこつになり、ゼーベ」

それにしても2日も寝てないで、ライラの攻撃を見切ったのか。
やはり格が違う。

でもまあ、強い必要は全然ないんだけどね。

平和な世の中……とまでいかなくとも、それなりに治安はいい。

「これからどうするの？」

これまで口を閉じていたお姉さんが話を切り出す。
口を開じていたのは僕に受け答えを任せてくれたからだ。
三浦さんは見事に寝ている。

「やつですね……。とにかく部屋を探して、田中啓やりえて……」

「せうじやなくて……、その……」

「？」

「いつになく歯切れが悪い。

今まで余裕を保ってきたお姉さんは大違いだ。

「これから、私と一緒に生きてくれる？」

「いいですよ」

回答はあつやつと。

「……もつ少し迷わないの？　いきなり私が一郎君のお母さんって言われて信じてるの？」

「うちの暗殺対象^{ターゲット}っていうのは、身内から逃げ出した人も入ります。しかも、うちの身内は兄弟のほかには、父親の妻、つまりお母さんぐらいしかいません。

お姉さんが嘘をつく理由もないし、フォルテやライラはこの事実を知っていました。

だから、疑つてないです」

「でも本当のお母さんだからって、一緒にいいかどつかは別でしょ？」

「どうやら、17年間もほつたらかしにした母親が今更しゃしゃり出てきていいのか、と聞いているのだろう。

でも、一緒にいたい理由なんていいくらでもある。

最初に普通に接してくれた人だから。

一緒にいて楽しいから。

初恋の人だから。

お母さんがいなくてさびしかったから。

これから一人で何もかもするのは、あまり自信がないから。もつと色々あるし、言葉にするより気持ちはずっと重い。でも、今言葉で表すならこんなところだと思つ。

「あら、他人の評価を当てるするの？」

「もちろん、一緒にいたいですよ。性格や容姿に関してはラーメンの店主のお墨付きですし」

「あら、他人の評価を当てるするの？」

「言葉」するの恥ずかしいし、マジメに書つても伝わらへりこと

思つたから、冗談を交えた。

下手な冗談だけど、お姉さんも同行することを認めてくれた。
……、とにかく明日から、大変になるなあ。

「いやいや、他人の評価は参考程度ですよ。あ、刑事さん、止まつ
てもらつていですか？」

「え、いいけど……、どうした？」

「ちょっとだけ買い物です。1分以内で戻つてきます」

「ああ、別に急がなくていいぞ」

その言葉を背に受け、パートナーから降つる。

そして、あるものを買ってパートナーに戻る。

「すいません、戻りました」

「いや、きにするな。じゃあ、走るぞ」

「はい、お願ひします」

そう言つてパートナーは再び走り出す。
相変わらず、サイレンは鳴つたままだ。

「そういえばお姉さん、今日は何日だと思いますか？」

「えーと、今日は6月10日ね。それがどうかしたの?」

「何の田でしょ?」

「母の田?」

「正解です。」というわけでカーネーションです」

買つてきたのはカーネーション。

丁度花井さんの前を通ったから買つたやうなり、母の田とこつたらこれでしきう。

「……、なんか嬉しいんだけど、一気に老けた感じがするわ」

「まあ、受け取つておこへただやうよ。親子再会記念といひ」とド

「……ありがとう。家族を捨てたときに諦めたことをやつてくれて」
「いえ、お姉さんが喜んでくれたなら良かつたです」

「じゃあ改めて…………、至らなごめんですが、これからお話しをお

願いします」

いきなり頭を下げられた。

僕も慌てて返す。

「僕も不束者ですが、お願ひします」

「へへへ、お姉さんの出で……いや、母との再会は幕を下ろした。

「これからお姉さんと僕が生きていることを知つて、兄弟が追つてくるだろ？
それを何とか、かわしながら、逃げながら生活しなければならない。」

それは大変だらうけど、お姉さんとなら出来そうな気がした。

「これからよろしく……、母さん。」

-完-

第九話 逃走の終わつと新たな生活の始まり（後書き）

これで、一応書き終わりです。
思いのほか時間がかかりました。

最後のこの話は夜が遅いと親に怒られつつ執筆して、猛スピードで仕上げて、見直しすらしないのでかなり *お粗末*になつてゐると思ひますが、時間のあるときに修正します。

一応、続話のネタは考へているのでそらが終わつたら、連載は終了にしようと思つてます。

そういえば、この話は母の日企画だつたんですよね。
3日送れての完結。だめですね。

ちなみに番外編第一回はバレンタイン。
次は何になるんでしょうかね。

今度からの番外編は特別な日じやない日になるかもしませんけど。
つていうかそつちの方が可能性高いです。

ちなみにこの番外編はネタバレ要素がかなりあります。
*First Mission*の黒幕が誰か分かつたり、*Third Mission*の登場人物も出てきたり。

極力伏せたんですけど、感がいい人、観察力がある人は速攻で気づきます。特に後者。登場人物少ないですし。
公開してから後悔……、「ごめんなさい。

できれば本編の方も読んでいただけたら幸いです。
読んでくださつた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741g/>

ファンタジーワールド番外編 - 訳ありのお姉さんと僕 -

2010年10月11日22時56分発行